

2021/6/14

Richard Ernst 先生との出会いと別れ

けいはんな文化学術協会 赤坂一之

NMR ニュースレター2021/06/09 で Richard Ernst 先生ご逝去の報に接した。これは虚を突かれた感じだ。まだまだお元気で再会できると思っていた。思えば、いろいろあった。

ともにインド磁気共鳴学会の名誉会員であったので、昔よくインドでお会いした。そのたびに、最後は必ず高圧 NMR の話しをされた。ノーベル賞の後、これに力を入れられたからだ。ノーベル賞受賞のずっと前の話のだが、日本で何度も NMR の講義をお聞きした。いつも長い講義を精力的になされ、それがなかなか止まらなかった。講演ではいつもとても丁寧なスライドをたくさん用意されていた。尋ねてみたら、全部自分で作っているという返事だったのでよくやるなあ(?)とちょっと驚いた。それから何年も経ち、1991 年のことだった。当時自宅のある大津にお招きして、近くの飲み屋にお連れした。おかみに“この人はきつともうすぐノーベル賞をもらうよ”といったら、ご本人は“私などとんでもない”と即座に否定された。しかし私の方が正しかった。その1ヶ月余のち、Rエルンスト・ノーベル賞受賞のニュースが世界に行きわたった。

20年後の2011年3月、日本講演旅行の際に東京で東北大地震に遭遇され机の下に隠れたりされたのち、最後に当時私がいた近畿大学和歌山キャンパスの「高圧力蛋白質研究センター」を訪ねてくださった。来訪を記念して、センターそばの紀の川平野を見渡す高台に、二人で白梅の苗木を植樹した。

満員の講演会では、例によって、この時も3時間ほど講義が止まらなかったと記憶している。ノーベル賞受賞決定直後の騒ぎから現代文明批判に至るまで、幅広いトピックスについて、面白おかしく息つく間もなく聴衆を魅了した。

講義はまず、私の高圧 NMR のパイオニア研究をほめることから始まった。彼はノーベル賞受賞の後さらに NMR の新しい領域開拓を目指して、私との競争で蛋白質の高圧 NMR に力を入れたが、結局一報の論文も書けずに終わったのである。失敗の原因ははっきりしている。彼のラボでも有用な実験データは出ていたが、それが何を意味するのかその解釈に迷い、遂に意味ある結論に達せず終ったのである。一方でスピン緩和から始まり、スピン拡散、温度ジャンプ、状態相関などと、すべて蛋白質に嫌われ続けた私の試行錯誤は、最後に始めた高圧 NMR 実験で初めて蛋白質に“好まれ”、それまで隠されていた“機能性励起構造”を初めて“表に出して”、私の蛋白質動態概念構築に道を開いてくれた。

近畿大学での講義のあと、お疲れのエルンスト先生を約8キロ先の果樹園に囲まれた拙宅にご招待し、そこで歓迎パーティを開いた。まず、近所の農家のおじさん、おばさんたちが来てくれて、庭で歓迎の握手で迎えた。“ノーベル賞が来るよ、握手したい人はおいで、、、”と声をかけておいたからだ。歓迎会では、伝統的日本建築の二間続きの座敷は30人ほどの若い人たちでいっぱいだった。参加者は学生から遠方から来訪の科学者たち、それに私の友人の一般社会人まで多彩な顔ぶれだった。宴会は学生たちの即席“スピンドダンス”を含めて楽しくにぎやかに、時間を忘れて盛り上り、エルンスト先生も上機嫌だった。。。。。

あくる朝、私一人、宿泊先の関空前のタワーホテルに出向いてエルンストさんともう一度お会いして、今となったら最後となった別れを惜しんだ。雑談の中で、“私の娘はね、私のノーベル賞受賞のことをあまり人に話したがるんだよ”と嘆いて？おられたことを今なつかしく思い出す。

和歌山に来られた時、足をけがしておられて始終草履を履いておられたが、講演は元気そのものだったし、身体は健康そうに見え、まさかこんなに早くお亡くなりになるとは思いもしなかった。今思えば恐らく少し無理をされて、講演の最後の地にどうしても和歌山を選んで来てくださったのだろう。私とは確か4歳くらいしか違わないが、私ももう“そんな歳なのか”一と今あらためて思う。

拙宅の庭にエルンスト来訪記念に植えたしだれ紅梅は、今大きく成長して毎春見事な花を咲かせてくれる。毎年この実を焼酎に漬けてこれを〔エルンストの梅酒〕と称し、いつかご本人に飲んでもらおうといつも妻と楽しみに話していたが、その機会をついに逸してしまった。学者としてだけでなく、人間としてもとても暖かくて信頼できる先達を失い、寂しい思いでいっぱいだ。

しかし道はまだまだ続いている。私はその先を続けよう。